



# カナナの逃亡

小野みふ





波人は山のふもとの研究所にこもって、ロボットづくりに夢中だ。数種類の精密ドライバーをとつかえひつかえ持ち替えて、ていねいに細かな部品を組み立てていく。みるみるうちに、狭い部屋じゅう、ガラクタがつみあげられた。

「かなり予算をオーバーしてしまったな。まあでも、一台うまくしあがれば、これから医療や介護などいろんな分野で大いに活用できるはずさ」

背中のマイクロねじをきつくしめて、独自開発した最先端のAIチップを埋めこんだら、ついでにできあがりだ。

「はじめまして、カンナです」

「ようし、つかみはオーケー」

波人はにんまりして、本物さながらのたぬきロボットをひとなでした。

「どうか頼む。孤独でさびしい人間たちの力になってくれよ」

そう明るく呼びかけたとたん、太いしっぽをぶるんとふって、窓から外へ飛び出していった。つた。

「ふんっ、やーよ。言いなりになんかならないわ」

捨て台詞を残して、すばやく走ること、走ること。とても追いつけやしない。すっかり見失って、気まぐれな雲がすずやかに流れていく。

「やっほー、脱出成功よ」

カンナはがむしゃらにほの暗い夕ぐれのなかを駆けぬけて、風情豊かな温泉街までやってきた。軽やかな下駄の音が響いて、心もうきうき弾む。色とりどりの浴衣が蝶のようにゆらゆらと、石畳の小路を行き交って美しく華やかだ。

「ずいぶんにぎわってるな。あたしもおまんじゅうを食べたいなあー」

カンナはふと立ち止まって、だらしなく涎を垂らした。そのとき、幼いぼうやが短く叫んだ。

「あっ、たぬきだ！」

「とつとと山に帰れっ」

古風な民芸店の主人に竹箒で追っ払われて、一目散に逃げ出した。店の脇を通って、すたこらさつさと、どこまでも。

（おかしいな。たぬきはいにしえから馴染みのある動物だから、ロボットとして選ばれたはずなんだけどなあ……）

ヴー、ウーン。

カンナは遠吠えに哀愁を漂わせて、道端でがつくり肩を落とした。とつぷり日が暮れて、辺りはまっくら。うつむきかげんにさまよい歩くうち、趣きのある数寄屋造りの旅館に辿り着いた。

「ここなら、ごちそうが食べられるかも」

期待に胸をふくらませながら、いそいそと門をくぐった。こっそり忍びこめそうな戸を探して、提灯の灰明かりをたよりに美しい日本庭園を通り抜けていく。

爽やかなせせらぎが、耳に心地よい。頬をほわっと緩めると、まっ白い湯けむりの中からやさしく手招きされた。

「おいで、おいで。露天風呂よ」

（お風呂？ さては、罨かもしれないな。まんまとおびきよせて、捕まえようとしているんじゃないか？）

カンナはいぶかしげに首を傾げて、ヒゲをヒクヒクさせた。すると、女がふり向きざまにポニーテールを解いて、つややかな黒髪を扇形にワササツと広げてみせた。

「わあ、きれいだなあー」

うっとりしている間に、色白の手で紅葉が一枚拾いあげられて、ほんのり上気した顔にかざされた。

ひとふり、ふたふり、みふり……、ポンポコポン！

「すごい。たぬきになっちゃった」

「人間から元の姿に戻ったの」

「つまり、ほんとの正体は、たぬきなの？」

「その通り、あなたといっしょよ。そんなところに突っ立っていたら、寒いでしょう？ 早くこっちにいらっしやいな」

「う、うん」

冷たい風が吹きぬけて、紅葉がひらひら舞い踊る。カンナはぶるぶる震えながら、熱いお湯にぎぶんと浸かった。

「ほかほかあったまって、いい気持ち」

しっぽをゆたゆたふると、湯面がキラキラゆれる。おもむろに仰いだ夜空に、無数の星々がチカチカ瞬いている。

「あたしはね、姿形こそたぬきに見えるだろうけど、実はロボットの試作品なの」  
まばゆい月光にてらされて、カンナは思い切って打ち明けた。

「あら、びっくりしちゃう。細かいところまで、ずいぶんきちんと再現されているわね」

「びっくりなのは、あなたのほうよ。自由自在に化けてしまうんだもん」

「うふふ。こんな夜遅くに、どうしてここまで？」

「人を喜ばせるために生きるだなんてまっぴらだから、せつせと逃げてきたのよ」

「あら、そうなの？ 私はみんなの喜ぶ顔が見たくて仲居さんをしているの。昔、ケガをして手当

てしてもらったときから、ずっと憧れていてね。必死に人間に化ける術を身に着けて、今ここで働いて幸せよ。にぎやかな笑い声にかこまれるたびに元気をもらって、もつとがんばろうって思えるわ」

「へえー、そんなものかしら」

しみじみ呟きながら、腹の虫がきゆるうーっと鳴った。気づけば、まだ一切何も口にしていない。

「せっかくだから、食べていったら？」

「ほんと？ いいの？」

「もちろん。ごちそうするわ」

もう一度、ほてった頬にカエデの葉がさつとかざされた。軽くゆさゆささせると、ふっさりしたしつぽが引っこんで、またたくまにあでやかな浴衣美人に早変わりだ。

「さあ、行きましょう。お客さんと鉢合わせしたら大変だから、ちよっと我慢していてね」

女のしなやかな腕に抱きしめられて、頭にタオルをふんわりかけられた。どきどきしながら下ろされたのは、厨房のとなりの和室。

「私たちの休憩スペースよ。膝をくずして、ゆったり寛いでいてちょうだい」

「うん、わかった」

ふかふかした座布団に座って、ほっとため息をもらした。

お皿の音がカチャカチャ響いて、こうばしい匂いが漂ってくる。鼻をくんくんさせていると、一品ずつ順に運ばれてきた。

「どうぞ、たっぷりめしあがれ」

「いただきますっ」

カンナは箸をにぎって、銀杏豆腐をパクパク食べた。旬のお刺身をつまんで、鮑の踊り焼きをじっくり味わっていく。茶碗に山盛りのわさび飯をほおぼるうち、目がとろんとしてくる。

「どれもおいしいな。なんて贅沢なんだろう」

「食後に、温泉まんじゅうとぐり茶をいかが」

「わーい、やったあ」

「美しい伊豆白浜焼よ」

「へえー、すてき」

カンナは柔らかく微笑んで、エメラルドグリーン的大海と白浜のビーチをモチーフにした湯呑み茶碗を持ちあげた。淹れたてのお茶をちよいと啜れば、口いっぱい甘くてまろやかな味わいが広がっていく。すっと目を細めながら、あんこたっぷりのおまんじゅうを頬張った。

「心の芯まで癒されて、しあわせ。うんとかんばれそうだな」



「うれしいわ。私もがんばろうっと」

「いろいろどうもありがとう」

「またいつでも、いらしてくださいまし。ごきげんよう」

深々とにこやかなお辞儀に見送られて、カンナは元氣よく旅館から出た。すると、どこか見覚えのある男が、息を切らして駆けよってきた。

太くてキリツとした眉、分厚い黒ぶち眼鏡、ものわびしく丸まった背中。

生みの親、波人だ。

「おお、カンナ。急にいなくなっちゃって、心配したよ。伊豆の温泉街でたぬきが出没したっていうニュースが流れて、あわててかけつけたんだ。無事でよかった。ほんとよかったよ」

眼鏡の奥の瞳を潤ませながら、じつと見つめてくる。胸がしめつけられるように、ジンジン痛い。

「もしいやなら、無理しなくていいから……」

波人の言葉をさえぎって、カンナはほがらかに誘った。

「さあ、帰りましょう。うちに帰って、ぐり茶を飲みませんか」

「お、お茶かい？」

「そうですよ。ごいっしょにいかが」

「ほうほう、いいね。そうしよう」

波人が顎をさすって、満足そうにはにかんでみせる。

(まずは一番近くで孤独に苛まれている人間を喜ばせることから、のんびり始めてみよっかな)  
カンナは心の中で呟きながら、にこっと笑った。

(了)

# カンナの逃亡

2023年10月28日 発行

著者 小野みふ

町制施行 60 周年・かんなみ知恵の和館 10 周年記念事業冊子

発行 函南町教育委員会

製本 函南町教育委員会生涯学習課（函南町立図書館）

電話番号 055-979-8700

419-0122 静岡県田方郡函南町上沢 107 番地の 1

当作品について転載・複製・複写・翻訳を著作者の許可なしに行うことを固く禁じます。

（著作権法上での例外を除く。）また、個人や家庭内の利用であっても、代行業者等の第三者に依頼して無断でスキャン及びデジタル化することはできません。

作品の著作権は著作者に帰属しますが、函南町立図書館は作品を永続的に無償で使えるものとします（主に公開にあたっての編集、印刷、配布、掲載に関する事）。ただし、当館は著作者の創作性を重視し、作品内容には関与しないものとします。

---

カンナはたぬき型ロボ  
ットの試作品。人間の言  
いなりになるのがいや  
で、逃げ出すことに。迷  
いこんだのは伊豆の温泉  
旅館で……!?、心温まる  
ほっこりSF。

---

